

は、玉堂と云茶入と、利休が圓座肩衝と計也、これも何程と云ことなく、無類の名物の様に云也、其後相國寺にありし名をも相國寺と云、唐の肩衝を、古田織部黄金拾一枚に、求む、是高直の初なり、程もなく加賀へ千五百貫に賣、是は織部治部と聞惡き故勘定をせつかれて、勘定の爲に賣られし也、道哲親圓淨坊取次て代金を持來りし時、老人織部方に居合せたり、黄金六十枚と蓮華王の茶壺一つ持來る、壺は此方より所望の由なり、圓座肩衝は、今江戸に有しが、丁酉<sup>三〇</sup>明曆<sup>三〇</sup>の火事に焼失すとぞ、日野肩衝は、日野唯心大文字屋にうり給ふ時、老人を呼て、此茶入黄金五十枚にうるべき約束す、少味惡き事あるほどに五十貫をとして、四十五枚になりとも美作殿などに御取あらば遣したき事なり、自分に袖に入持往見せよとの給ふ、見せけれども代物調かねたるに因て首尾せず、遂に大文字屋が手に落つ、

〔梵舜日記〕慶長五年正月十六日、神樂衆之内久右衛門、棗茶入レ持來、

〔寛政重修諸家譜 二百九十七〕土井利勝、慶長十五年八月三日、御使をうけたまはりて、駿府にいたるところ、東照宮御前にめされ、紹鷗圓座肩衝の茶入をたまはり、將軍家の左右につかふるうへは、諸大名と會合すべし、よりてこの茶入をたまふとなり、

〔駿府政事録〕慶長十六年十二月十日、今日自攝州大坂、織田入道有樂<sup>〇</sup>長<sup>〇</sup>著府、十四日、今朝織田

如庵有樂於御數寄屋賜御茶、日野唯心、山名入道禪高爲御相伴云々、檜柴肩衝之御茶入、朱衣肩衝御茶入<sup>入</sup>、<sup>入</sup>海茶、虛堂之御掛物、古銅御花入、令飾之給、大御所令入花給、有樂立御茶、其後於前殿、有樂獻

黄金三枚、吳服五重、十七年二月廿八日、松平陸奥守政宗、銀千兩、鮭鹽引十箇獻之、生駒讚岐守、銀千兩、吳服十領獻之、於御數寄屋件兩人賜御茶、御茶入投頭巾、所謂投頭巾、昔年珠光始見此肩衝時、取頭巾持之、歎美之餘、不覺擲頭巾、依之有此號、朱衣薄茶入、日野唯心被召御相伴云々、三月廿六日、大御所<sup>〇</sup>德川<sup>〇</sup>康<sup>〇</sup>於御數寄屋幕下<sup>〇</sup>德川<sup>〇</sup>秀忠<sup>〇</sup>御招請、日野唯心、若狹守御相伴云々、其後午刻及、又幕府